同訓異解

い

●いふ

曰口より出す

云いつてしまつた事又前の事をあげる

言説明する

謂事をさして評判する

道筋合を語る

稱それにかなふやうに又ほめていふ

●いる

入出の反對内へはいる

内外の反對外のものを引入れる

納しまひ置く

炒こがす

熬いりつけにする

鑄いかたにいこむ

冶湯加減する

●いむ

忌いやがる

諱はゞかる

●いゆ

痊病がさつぱりとふにる

癒だん〳〵よくなる

瘳根が切れる

●いこふ

息いきをいれる

休其事終りてひとやすみする

憩小やすみする

●いぬる

寢ねどこへはいる

寐ね入りこむ

瞑たゞ目をふさぐ

●いたむ

い　三

痛いたみを身に覺ゆ
疼絶間なくいたむ
悵まゝならぬを本意なく思ふ
愴物事に感じて悲しくなる
悼死などをふびんがる
惻氣の毎に思ふ
隱深く思ひやりする
慘悲しくて心が浮き立たぬ
慟絶入るほど悲しい
戚心配する
傷思ひわづらふ、

●いかる
怒はらたてる
恚いつまでもあとをひく

忿うらみいかる
瞋目元にあらはす
憤内の鬱積したものが外へ發する
慍むつとする
艶顏色をかへる
眄目をみはる
懲いかりがみちみつる

●いやし
賤貴の反對
數多くてやすつぽい
陋下品なる
野そまつなる
鄙都の反對やうすぎたない

●いたる
至ゥの所へかゝる

到行きつく
臻すきまなくし
臻きりにくる
臻四方より一つまなる
造おしかける
詣滯り留る

●いたす
致をこまでやりつける
輸舟車で運ぶ

●いきる
生いのちがある
存無難にながらふ
蘇よみがへる
活氣が内に滿てはたらく

●いのる

祈當座一寸助を求む
禱ごうぞさうありたいと常に念がける
禳惡事災難をはらひのける

●いだく
抱手にかゝえて身につけ保つ
擁兩手で圍み持つ
懷大切にしまひ置く

●いさを
功しるしが人の目に立つ
績仕事がはかゆく
勳成就して滿足なるきみ

●いづれ
何時又は處に用ゥ
孰物の比較又は人に用ゥ

い　三　四　五

●いつはる
僞にせ物をさうと思はす
佯内には然らざるを外には然るべくいふ
詐一時のがれのうそをいふ
詭約束を違へる

●いましむ
戒あらかじめ用心する
訓身にしむやう
警先方の氣のつくやうにさとす
箴きつとさうするやうにいけんする

●いはんや
況これだのにと例をひいていふ
矧かくある上に尙更にふに及ばぬきみ

●いよく
愈その上にだんく進む
彌ひろがり一ぱいになる
逾のり越えて進みゆく

●いさぎよし
廉分別ありてまつすぐなる
潔一點のけがれもなくさつぱりしたる
屑よしと思て氣が進む

●いそがはし
忙閑の反落ついて居られぬ
忽心がさうぐしい
急氣が何となくせかくする

●いつくしむ
慈ふびんに思ひあはれむ
愛憎惡の反かはいがる

い　五　は　二　三

寵あしらひをよくする

●いづくんぞ
焉たゞ何としていふきみ
安どこにてあるものかどうしてさがすきみ
惡どうしてあれがとけなすきみ
烏中々どうしてと藝する

●いとけなし
幼丁年にならぬ間
稚年がゆかず未熟なる
嬰手にかゝるみどりご
孩やつと笑ふほどなる

は

●はる
張ひつぱり出す
貼はりつける

●ば〻
婆年を取つた女
嫗年を取つて腰の曲つた女
嫗慈愛深き老女

●はこ
篋細長きもの
筐眞四角なもの
箱たゞ物を入れるもの
函はこにしたるもの
匣かぶせぶたのあるもの
匱人に見せぬやうにしたるもの

●はづる
愧わが心中に見ぐるしく思ふ
慚はぢ入つて面目ない
恥心に深くくはぢ入る
辱榮の反對外聞わるい
羞顔が合せにくい

●はかる
計かぞへてつもりをする
謀仕組して相談する
議おし極めて判斷する
量升目寸尺などを測深淺をはかりみる

●はじめ
始終末の反對まださうならぬ以前
初事物のはじまり

創新たにはじめる
首それをかしらとして
甫はじめてといふきみ

●はるか
遙ひろ〻くと遠ききみ
遐遙の反對へだゝりて遠い
杳目のとゞかぬほど
渺水面が廣くてはてしもない

●はなつ
放手をはなして向へやる
發內よりぱつと外へ出す
縱自由にしてやる

●はさむ
挾二つのものにて持つ

は　三　四　に　二　三

挿中へさしこむ

●はしる
奔かけ出す
走目あての處へ早くゆく
馳急にゆく

●はなはだ
甚存じの外なること
太すぐれて
孔仰山なること
酷むごくあたること
絕外に類が無い

に

●にる
煮よくにること
煎水煮にすること

●にはか
俄思ひがけない急な事に出あふ
頓早速に
暴ひどく急なる
遽ふいと

●になふ
荷兩方に物を置いて中を肩にて持つ
擔片一方に持つ
負背におふ

●にらむ
睨横にらみにする

に　三ぼ

眦目じりに力を入れる
睃うらみ見る
瞪目ばたきもせず
●にげる
竄こそくとにげかくれる
逸その所をぬけ出る
北負けて敵にうしろを見せる
●にくむ
惡好の反對
憎心にいやに思ふ
愛つらにくく思ふ
嫉それみに思ふ

ほ

●ほとり

三四五へ二

邊物の端
濱海ぎは
滸水に近いところ
畔わきのみち
頭物の出たるとり
瀬つきの處
湄つきあたりて向のなき處
湄(潯)滸とほゞ同じ
●ほむる
頌祝賀をのべる
褒貶の反對・引上て見せる
賞罰の反對
譽人の目に立つやうにす人の反對
稱人の美名をほめそやす
讃とりはやし評判する
讃内なるを外へあらはす

●ほとんど
幾大かたといふきみ
殆いま少しで
危左こそあらめと將來をいふ
●ほしいまゝ
放やりばなしにして
縱とりはふしてすて置く
擅手前勝手にあつかふ
恣氣まゝに惡い事をする

へ

●へる
減多き數が少くなる
耗いつとなく不足が立つ

損そこなひ欠ける
經通り過ぎ去る
歷小口より一つ〳〵へる
●へだつ
隔はなれて居る
障中にさゝへがある
阻邪魔ものが横はる

と

●とふ
問言葉を以て尋ねとふ廣く用う
訪人の所を見舞ふ
訊筋合をぎんみする
詢信實にとひはかる

へ　三と　二三

諮おし尋ねて相談する
詰知つて居て責めとふ
●とる
取舍の反對我方へとりいれる
執しかと手に係つ
秉柄のあるものを手にてにぎり持つ
捫兩手にてさぐりとる
挈手にてさげる
採つまみとる
把秉に同じ
捉手の内へとらへる
捕にげたものを追かけつかまへる
●とく
解ほれ〳〵に仕わけける

釋ことわけをつける
註意味を說きあかす
融陽氣が通つて雪なごがとけるきみ
●とも
朋同じやうに相並ぶ人
友氣の合ひて親しき人
侶大勢つれたつ
俱目的を一つにする
偕うちつれる
共互に寄合つて衆と事を一しよにする
與相手にくみあふ
●とまる
宿ねとまりて向へ行かぬ
泊舟をつないでとまる
外の事には用ゐず

と　三四

●ところ
處そのありどころ
所物をさしていふ

●とほる
通塞の反對
よくゆきかよふ
透中へすき入る
亨すらく〜とゆきわたる
徹底までつきぬける

●とほし
遠近の反對
側でなく向ふへとほい
遐はつきりせぬ程
遼づ〜とはなれてとほい

●とづる
閉開又は啓の反對
しめきりにする

杜ふせきしめくゝる
噤物のいはれぬやうに口をふさぐ
封一所にあつめて外へ見えぬやうにする
鎖錠をおろしてたてしきる

●とゞまる
留そこにのこつてどこへもゆかぬ
止それぎりに動かぬ
遏おさえつけてやらぬ
停ゆくのをやめる
駐はやくゆくのを引とめる
逗中途でとまる
淹留の字より久しきゝみ

●とゝのふ
調兩方より合せてよいかげんにする

劑藥をまぜ合はす
齊長短大小などがよくそろふ
整物に次第があつて立派なる
諧思ひ合つてよく和しゆく
和仝上

●とらへる
囚にげ去らぬやうにとらへ置く
幽人目にかゝらぬやう
俘軍中にてとりこにする
捕あとから追かけて
虜いけどりにする

ち

●ちり

塵土の細かなるをいふ
氛ごみの立つけしき
埃ほこり

●ちかし
近間の遠からぬこと
邇こちらへ寄つてちかい
幾もう少しで手のとゞくやうに思はる
庶大ていその位にゆく
殆そのきはになる

●ちかふ
盟行末かはるまいと
誓言葉で約束する

●ちまた
街行儀よく通りたる町

ち　二三ぬ　二三を　二

巷辻小路
阡長くつゞきたる町
陌阡を横ぎりしたる町
岐二つに分れたる道
逵四方八方に分れたる道

ぬ

●ぬく
挺さやをはづす
擢無理に引出す
拔小口より引出す
抽のばし〜ひつぱり出す

●ぬすむ
盜人の物を持ちゆく

竊人の目にかゝらぬやうにそつと取る
偷仝上

を

●をか
岡地の少し高き處山のひく〜て平かなるもの
阜池のぐるりの小高き處
邱長く平らなる處
陵つき立て高き處
阜土を積み上げたるもの

●をぢ
伯父の兄
叔父の弟
舅母の兄弟

を　二　三

●をば
姑父の姉妹
姨母の姉妹

●をごる
驕謙の反對
心が滿て高ぶる
奢儉の反對
萬事奢を美にする
侈約の反對
みえを張る
倨人を相手にせぬ
傲見下げ輕んずる

●をろか
愚くらくしては
たらきがない
惷生れつきこころい
鈍氣がきかぬ
頑かたくなで是非
のわかちがない

魯才智がはたらかぬ
癡りかうでない

●をさむ
治それ〳〵取りあつかふ
理筋道をつける
修惡いところをなほす
収外のものを內へとりいれる
斂外より見えぬやうにとりあつめる
藏たくはへしまつておく

●をしむ
惜心に殘り多く思ふ
齋みだりに用ゐぬ
愛手ばなしにく〳〵心をかける

●をかす
侵向ふの領分へ入り込む
犯してならぬ事をする
冒氣を大きくして向ふへつき入る

●をはる
終始初の反對はてまでいつてつきる
畢仝上
竟とう〳〵そこでとまる
沒なくなつてしまふ
了さつぱりとちがつく

●をしふ
教みちびきさづけてがてんさする
誨ていねいに言ひきかせる
訓其通りに從ふやうにいひきかせる
諭向ふが氣のつくやうにさとす

●をどる
跳足をそろへて飛びあがる
躍仝上
踊小をどりして足を地につけぬ

●をこたる
怠氣ぶしやうにしてはりがない
慢なほざりにする
懈勤の反對ものに精が出ぬ
惰物をうちすておく懈より甚だし
緩のびてはたさぬ

わ

●わく
涌水が下よりあふれ出る

を　三　四　わ　二　三

湧水が地中よりふき出る義ひろし
沸にえかへる

●われ
我他に對して此方といふきみ
吾手前といふ心我より
吾は高ぶりたるきみ
朕天皇の御自稱に限る
予廣く自分をさしていふ
余われらにて他人より承けておとなしき〳〵みい
僕自ら卑下していふ
儂詩又は俗語に用ゐて正文には用ゐず

●わづか
僅物の少ないこと
纔僅より少し輕し
やつとといふきみ

●わかる
分二つになる事
別一しよのものがわかれ〳〵になること
訣いとまごひしてそこをはなれる事
頒それ〳〵にくばること
拆切り又は破つてべつ〳〵にする

●わらふ
笑をかしくて口を開く義ひろし
莞にこやかにほゝゑむ
哂齒をあらはしてわらふ
嗤あざけりわらふ
哈仝上
哄どつとわらふ

●わたる
渡水の上をこちらより向ふへゆく

わ　三四

涉 水に入りてかちわたりする
濟 向ふまで届き果たさしむ
蹊 道なき處をつけ〳〵ゆく
亘 それからそれへ引わたす
彌 仝上

●わかし
少 まだ年がゆかぬ
佼 わかくて色つやがうるはしい
幼 十歳を幼といふ
稚 幼とほゞ同し
弱 二十歳を弱といふ
壯 三十歳を壯といふ

●わざはひ
禍 福の反ふしあはせなる

か　一二

災 時のまはり合せ
殃 神のとがめにて不仕合にあふ
危 難義な目にあふ
冤 むじつのさいなん

●わづらひ
煩 簡の反事多くて面倒なる
累 かゝりあひになる

か

●か
歟 疑の辞
耶 問の辞

●かな
哉 嗟嘆の心にて疑もなききみ
矣 かうあつた又かうあらうといふきみ
夫 哉字に似てやゝかろし
乎 嗟嘆の心にて疑ひ問ふ又かともよむ

●かく
欠 數の不足したる
欽 完の反對破れ損じたる
虧 盈の反對かけて不足が見える

●かる
借 人の物を以てわが用をたす
藉 仝上
假 當座のまに合はす

●かつ
勝 負の反對勢のすぐれたること
捷 手早くしてかつ

克 勝にくきものにかつ
贏 すべて勝負事に用う

●かれ
渠 只かしこと指して輕んじたるきみ
彼 此又は我の反對

●かふ
飼 ものをくはせること
畜 家に置いてそだてる
買 あたひを出して引とる
賈 賣る爲にかふこと
購 即ち商賣用にかふ
沽 小かひすること

●かげ
影 物の形のうつるをいふ
陰 日のあたらぬところ

か　二

蔭 樹木のしげりたるところ
庇 立寄るべきかげ

●かむ
噬 かみきる
嚼 味はひながらくふ
咀 口の中でかみこなす
咬 くひつく

●かは
河 流の大なるもの
川 流の小なるもの
皮 すべて表面をつゝみたるもの
革 動物の皮のなめさぬもの
韋 仝上なめしたるもの

●かみ
神 天に屬するもの
祇 地に屬するもの
靈 まつりたるみたま
髮 頭上の毛
髫 小兒の頂の毛
鬢 多くて黑きかみのけ

●かす
糟 少し汁氣のあるもの
粕 しぼりかす
滓 煎じかす
渣 正味の無くなりたるもの

●かご
籠 竹藤などにて作りたるもの
籃 仝上小さきもの

●かめ
甕大がめ
甌小さくして底深きもの
瓶水を貯へるもの
瓮耳のあるもの

●かなふ
協互に心の思合ふこと
愜十分にして心がゝりのなきもの
適物事其宜しきを得たること
副ひかえになつてたすけるきみ

●かゝる
懸ふらりとちうにかゝる
掛これがそれにひつかゝりとまる
係それにつながれてのがれぬ
鉤かぎにかゝる

●かはる
變形、模樣が速にかはる
化だんゝ形をかへてゆく
交入れかはる
代他のあとを引うけてかはりに立つこれとふりかはる
易
渝中途でころりとかはる
替すたりかはる
免物を以て物をかへる
換これをかれにかへるほゞ免と同じ
更改まりかはる

●かへる
歸もとの目あてのところへかへる
還めぐつてもとへかへる
返再びもとへかへる
反うらへひつくりかへる
復もとの通にかへる
回やつたものがもとへもどる

●かたし
堅脆の反對やぶれも折れもせぬ
固動かしにくい
牢すわりがかたくてぬきもさしもならぬ
剛柔の反對おしがつよくてばりがある

●かゝぐ
揭物のさきにつけて高くあげる
挑はねあげる
褰衣のつまをとる

捲垂下したるものをもとへまきあげる
搴手を以て上げる

●かくす
隱外へ出さぬ
藏内へ入れてしまつて置く
匿人に知られぬやうにしておく
韜包みかくして置く
祕人に見せにやうにする

●かつて
嘗前かたひろく用ゐ
曾過ぎし一度といふきみ

●かわく
乾濕の反
燥潤の反うるほひがとれるはしやぐ

晞光熱にあびてだんゝ
晞しめりがなくなる
渴のどがかわく

●かれる
枯榮の反生氣が失せる
槁かれきつて乾くこと
涸水がつきてしまふ

●かさなる
重いくへもかさなる
疊つみ上げつみあげる
層一段ゝと順にかさなる
累引つゞきかさなる
襲衣の上に衣をきる

●かんがふ
按おちついてしらべる
考その具合をさぐる
稽念を入れてはかりみる

●かなしむ
哀心からふびんで見すてがたい
悲喜の反思通りならぬ
愀思ひ感ずる心持

●かんざし
笄横はりたるかうがい
鈿金銀などにてかざりたるもの
簪冠につらぬきたるもの
釵琴ぢのかんざし

●かへりみる
顧うしろを氣を付けてふりかへる
眷目をかけてかへりみる

眄横目をつかふ
省身の上を考へ吟味する

●かまびすし
喧大ごゑでやかましくいふ
嘩人聲のにぎやかなること
噪群鳥の聲々になること
鬻道理もなく只口やかましい
聒耳のそばにくひつくやうのきみ
譁口々にやかましくいふ
囂口がうしやにいふ

●かたじけなし
忝身に餘ること
辱けがしはづかしめる

よ

●よ
世どこまでも連續してつきぬもの
代入りかはりゆくもの

●よる
憑(恁)もたれかゝる
依よりそひしたがふ
仍その通りになる
仗たよりにする
寄それをかりものにする
因手がゝりにそへてゆく
據れをあてにする
由そのすぢあひをいふ
靠しがみつく
賴人をたのみにして仕合なること
夜日沒の後
宵夜のふけたるをいふ
更夜中のこと

●より
自それからこれから
從全上

●よし
亙下地から自然とよきこと
吉凶の反きづかひのなきこと
美醜惡の反みごとなること
好かほかたちのよきこと
佳出來のよきこと

喜怒の反うれしがるきみ
能わが自由にできるきみ
善だれが見てもすくやかたち
可否の反これならまあよしといふきみ

●よぶ
喚大聲を出してよびかへす
呼遠くから聲をかける

●よわし
弱しっかりとこらえ難い
孱ちちあかぬ

●よろこぶ
喜怒悲愛の反心のうれしきこと
悅心にたんなふする
怡にこ〳〵としてたのしさうに見える

よ 二三四

懌心うちとける
欣氣も心もうきたつ
歡中のよきこと
賀目出たき事を祝ひて物をおくる

た

●たゞ
徒むだなること
祇わきへゆかぬこと
唯一づにそれにかしこまる
第なにがなしにまづそれといふこと
啻それのみでなくまだ外にも
只そればかり

●たつ
立成就してすわりがたつ
起臥て居るのがおきたつ
建物をおこしたてる
樹居すわらせる
斷間をきりへだてる
絕張りたる糸をきりはなす
裁切つてしたてあげる

●たに
谿地の凹みたる處の水流
澗山の間の水流
谷兩山の間にて水の有無に限らず
壑くわらりと開いたる落込の穴

●たき
瀧河瀨の水の疾くはしり流るるもの

た　二三

瀑高處より直ちに水の落つるもの

●たみ
民すべてひろく人物をさす
黎賤しきほどのもの
隷人に使はるゝもの

●たとへ
縱さうあるとも又よしそれにしたところがかれとこれとひきくらべる
譬

●たゝく
叩首を地につける
敲音聲を出すやうにたゝく

●たづぬ
温下地の事を忘れぬやうにする
尋筋道についてのがれたるを

跡あとをしたひさがす
討さぐり吟味する
繹絲口を引出す

●たのむ
憑もたれかゝる
怙まさかの時はかさあてにしてたる
頼味方だよりにする
負うしろだてにする
恃心だよりに思ふ

●たれか
孰どのやうなものが
誰その人の某なるかわからず
儔多くの中で或ものをさす

●たるゝ
垂ぶらりとしだれさがる
低ひくくなる

●たゞす
正邪の反まむきになほす
糾ゆがみをなほす
匡その物が段々なほるやうにしてゆく
督そばより氣を付ける
董仝上
訂つき合はせ吟味する
質かんがへ定める

●たかし
高みあげるやうなる
昂首をふり上げるきみ
喬樹木などのすらりとのびたる

隆むつくりと持上りたるきみ

●たもつ
有我物にして失はぬやうにする
保そこなはぬやうに大切にする
持失はぬやうに取つておく

●たまふ
賜(錫)上から賞めて下さるもの
賚拜領の品
俸口すぎの爲めにもらふもの
給間に合はせるやうに下さるもの

●たほる
仆頭の方が地につく
倒さかさまにひつくりかへる
斃つかれていきがつきる

僵ふんぞりかへる
殪殺したほす
踣つまづきこける

●たすく
佐身を入れて世話やく
佑そむかせぬやうに
扶ころばぬやう
に手をそへて
援ひき上げすくふ
翼左右よりかゝえるきみ
輔ひかえになつて氣をつける
弼氣にさはつても爲めになるやうに
介間へ入りてはさみたすく
助力をそへてやるところまでやらす
丞あとよりかゝえるきみ

●たがふ
差あれこれになつて筋が合はぬ
違はなれうむく
齟くひちがふ

●たへる
耐自然と持ちこたへる
任力のつゞくかぎり身に引うける
堪しんぼうして
なしとげる
勝向のものにおしかつきみ

●たけし
武文の反あたりがつよい
猛あらけなく威勢を振ふ
猖(獗)あばれさわいで手に合はぬ
勇怯の反心きつくてひるまぬ

悍じやうがこはくて むしやうにすゝむ
驍一歩もあとへ ひかぬきみ

●たくみ
工じやうづなること
巧手がこんでみごとなる
匠職人の頭取をいふ

●たぐひ
匹二人を匹といふ つがひならぶ
儔四人を儔といふ
倫すぢがわかれて亂れぬ
述中よく合つてはなれぬ
類同じ種類の品々なる
比それとひとし くらぶ ならぶ
屬それにつきし たがふきみ

●たゞちに
直曲の反 わきめふらずまつすぐ
徑ちかみちする

●たちまち
忽思ひがけなく
乍見るうちにさつそく

●たつとぶ
尙大切なものに して立ておく
貴暖の反 上品とする
尊卑の反 凡て敬し て上座におく事

●たがひに
迭入れちがひたる
互左右から入りくむ

●たまし く
偶思もよらずふいと
會折よく兩方から行合ふ
適丁度それにはまる
邂(近)はからずゆ きあたる

●たのしむ
樂苦の反 あんじる事ない
娛氣をのばしてな ぐさみたのしむ
嬉心うきたち遊び興する

●たくはふ
蓄つかはずにためておく
貯きれねやうに とつておく
儲無い時の用意と してとつておく

●たひらか
平高くも低くもない

坦少しもさはりなくま つたひらなること

●たゝかふ
戰兩方より打合ふ
鬪勝負を爭ふ
格ちからくらべする

●たてまつる
獻物を目の上に さしあげる
上仝上
奉目八分に持つて出る

そ

●そふ
添數がます
副かけがへになる

沿つきしたがうてゆく

●それ
厥その物その事
其それがと物を 指していふ
夫それがあのと ひろきゝみ

●その
苑草木のしげりたる處
園にはの形につ くりたる處
圃たけ
囿禽獸をやしなひおく處

●そしる
誹譽の反 他の惡をいひたてる
謗わるく思はせんと てかげぐちをいふ
譏惡事をとがめ ぎんみする
讒わるくいうて相 手をいひおとす

●そむく
乖ゆきちがはせる
背うしろむきに うらがへる
叛味方のものが敵となる
負(反)恩にたがひ 德を忘れる

●そなふ
備かうあらうとか ねて用意する
供用にたてる
具よくそろつて
欠く處なし
饌食物をならべたてる

●そゝぐ
沃かけてしみこます
澆あびせかける

そ　三四五

灌花卉などにかける
漑田地などに水を行渡らす
濺とばしりをはねかける
漱口を清める
灑まきちらす

●そこなふ
害利の反いためて勢をとめる
賊ころしていきをとめる
傷きづいけて自由を失はせる
戕見る目もいたましいやうにする
損定数のものを段々へらす

●そばだつ
峙山などがすつくりと立つをいふ
側かたよつて不満足に立つ

つ　二

歇下すわれども上の一方があがるきみ

●そゝのかす
唆しりおしをする
嗾けしかける

つ

●つぐ
續断の反
嗣その世のあとつぎ
亞そのつぎになほる
繼たえぬやうにつぎゆく
次物のつぎ〳〵になつてゆく
接物と物とをつぎ合はす
襲こちらからおして取る

●つく
突向ふへつき入る
衝つきあたる
撞物へぶつゝける
舂うすにて幾度もつく
就それにより付く
附添へつける
即そのづをはづさずもつてゆく
著ひつゝいて離れ難い

●つみ
罪悪事と定まりたる事
辜罪より輕し悪事であると名付ける

●つち
土すべて地の面をいふ

壞分れてかたまりなきもの

●つとむ
力ちからかぎり氣張る
勤精を出して事をする
努ちからを入れてはげむ
勉むりにやりつける
孜やめずに精出す

●つゝむ
包外をおうてその中にする
裹くるくるとまはしつゝむ

●つくす
悉一から十までのこさぬ
歇十分にしてのける
盡底をたゝいて無くしてしまふ

つ　二三四

殲殺して一人ものこさぬ

●つくる
造物を仕入れ立てる
作或わざをしおこす
製見はからつてこしらへる

●つよし
強弱の反こたえるちからがある
勁ちからつよい
剛しぶとくつよい

●つひに
終始の反おしまひかうだ
遂それからつひかうなつた

●つかふ
仕身をはめてつかめをする
事用むきをつとめる
使人をわが指圖にまかせる

●つかるゝ
疲骨があらはれるほどにやせよわる
憊精神氣力がよわる
勞からだがたいそうになる
羸つかれやせる

●つゝしむ
敬うつかりせぬやうに心を持つ
謹氣を付けて大事にする
愼うちばにして物をそまつにせぬ
肅うやまひ引しめる

●つらなる
連つゞいて居る

つ　四五　ね　二三　四

聯 仝上
列 順序よく立ならふ
陳 次第〳〵にならべてゆく
綿 きれさうできれず永くつゞく

●つまづく
躓 ふみはづして足がとまらぬ
跌 うつかりこける
蹉 足がもぢる
躓 足が物にあたる虞く用う

●つらく
熟 よくその事をねりつめる
倩 心を用ゐ念を入れる

●つかさどる
主 其場の第一位となつて動かぬ

職 わが身に引うける
司 ものゝかしらとなつてとりさばきをする
掌 自ら其事をつとめる
宰 さしづをする

ね

●ねる
煉 火にかけてねり上げる
錬 金をふいて幾度もねり合はす

●ねがふ
願 心にかうしたいと思ふ
悃 ぜひどうぞとたのむ

●ねむる
眠 目がふさがる
睡 ぐつすりねこむ

●ねんごろ
欵 立入つて世話をする
苦 こみ入つてしんせつにする
懇 ぜひにといふきみ心にこめてしんせつにする

●ねぎらふ
叮(嚀) 油斷をさせぬやうにくりかへしくす
慇(懃) おろそかに思はぬ
勞 あいさつをしてなぐさめ謝する
犒 物をやつてもてなしあしらふ

な

●なく

泣 涙を流して聲は立てず只心でなく
號 大聲を立てゝなく
鳴 情内に溢れて聲外に出づる
啼 心を聲に交へ出してなく
囀 虫のせはしく聲々になくこと

●なす
成 しくじりなし
爲 或事をする其しわざをいふ
作 こしらへ立てること

●なし
莫 有るか必らずないといふいみ
靡 あるまじといふきみ
亡 存の反あつたものがなくなる
無 有の反もとから何もないこと

な　二三

●なほ
猶 まだ〳〵又其樣なといふきみ
尚 又其上にも
仍 あひもかはらす

●なみ
波 水面の風に吹かれて動くもの
浪 仝上のやゝ荒きもの
瀾 仝上の尚ほ大なるもの
濤 つきかけくる大なみ
漣 ごく細かきものにてさゝなみのこと

●ならふ
傚 それをかたにしてまねる
習 ふだんそのあんばいに手なれる

●なれる
狎 相對づくに心やすくなじむ
馴 なづく
擾 自由になる
褻 なれしみて人前に出されぬ

●ながし
長 短の反たちのびて居る
永 いつまでも絶えぬ
壽 いのちがさはりなくのびる

●なげく
嘆 ためいきをつく
歎 聲をひいてなげく
嗟 感じ入る
歔 すゝりなきする
慨 口惜しく思ふ

な　三四

働 氣をとり失ふほどにつよくかなしむ

●なんぢ
爾 その方といふきみ

汝(女) 衆中の一人をさしてきさまといふきみ

子 男女の通稱にて少しあがめたるきみ

●なんぞ
那 なんであるぞといふきみ

奚 どこから出たかと根本を推問するきみ

曷 これだのにどうしてと道理づめにするきみ

何 どうしたのかわけがしれぬ

●ならぶ
並 立ちならぶ

竝 全上

併 一しよにする

排なみよくつゝきならぶ

●なむる
舐 舌にて一すれふる

嘗 たべてそのあんばいをこゝろむ

●なかば
半 物を中分する

中 中通りのあたり

央 まん中のしんをいふ

●なぶる
弄 なぐさみにもちあそぶ

弛 わが自由にする

●なみだ
涙 目から出る汁

涕 絶えず出るなみだ

泣 聲を立てず出るなみだ

泪 鼻から出るなみだ

●なげうつ
抛 うつちやつて向まかせにする

擲 ほゝりつける

●なかだち
媒 配合の取合をする

妁 とりばからひ世話する

介 兩間に立つてどちらへもつかず只取つぎをする

む

●むなし

空 とらまへどころなく中がからなること

虛 實、盈の反中に一ぱいない

曠 とりはなしなること

●むかし
往 ゆきすぎた以前

昔 今の反今よりは以前

●むかふ
向 面のむかふ方角

對 まつ正面

迎 立つて出むかふ

邀 むりにさへぎりとめる

●むくゆ
報 しかへしをする

酬 わがうけたものをまた先方へうけさせる

侑 格別の返禮をする

●むせぶ
咽 いきがつまる

噎 のどにつまる

哽 のどに物がこだはる

●むさぼる
貪 あくまで强慾

婪 むりむたいにほしがつてあまさぬ

饕 口ぎたなく大食する

餮 いくらでもくひつくす

吝 出すことをいやがる

む　三四

う

●うる
賣 あたひを取り手を放す

售 居ながら物をうりつける

沽 小うりする

●うゝ
餓 食物が不自由なること

饑 こく物が不熟にたべるものがない

饉 全上

飢 はらがへつてひだるい

●うつ
擊 たゝき合はす

打 ゆきあたるかたち

撲 ゆきあつて拂ふ

撻 肉にこたえるやうにたゝく

拍 手のひらにて兩方からうち合はす

う　二三

毆棒などでなぐる
討せめ吟味する
伐一いきにうちこらす

うむ
生自然とはえ出る
産うみだすかたち

うち
内うちがはをさす
裏表にひつそふたるうち
中づゝと奥の方

うみ
海しほ水にて底の知れぬほどのもの
洋大うみのなだ、
溟ひろくて見はてのないうみ

うでく
動靜の反じつとして居ふい
揺定、又固の反ぶら〳〵ゆらめく

うつす
移うつりかはつて
徙あちらへつく
あちらへ行つたりこちらへ來たり處をかへる
遷一方から一方へ
塲所をかへる
映光うつるひ影がうつる
寫下地の通りをかきうつす
摹その形をまね似させる

うらむ
怨恩の反にて心の内にいしゆがのこる
恨殘り惜しく思ふ
憾全上の稍淺きもの

うくる
受向からくれるものを進でうけとる
享御受納下さいといふきみ
承うけみになつて下よりのせる
稟それ〴〵にわたす

うづむ
埋上より見えぬやうにかぶせいける
塡足らぬ處へ物を持ゆき一ぱいにうめる
湮見えぬやうにふさがりしづむ

うかぶ
浮自然とういて中途にあり
泛處定めずういて居てしづまぬ
汎水の上に流れ漂ふ

うぱふ

奪予の反むりにひつたくる
篡向のものを横取りする
褫物をはぎ取る

うたふ
歌のゞで聲をしらべる
頌盛德をほめたてる
嘔ばなうたをうたふ
謠ふしをつけてうたふ
誦そらよみする
賦詩歌をよみあげる

うれふ
悄心さびし
愁心が悲しくて
患災難等にあつてあうきゝくせぬんじくらうする

う　三四

憂心の内でふさぎあんじる
惆悲しさにさつぱりせぬ

うゑる
植たれをまいて
樹たてばしよにしてうゑつける
栽樹木などをうゑる
藝苗などを行儀よくうゑつけならべる

うるはし
美醜惡の反見えのよきこと
麗形がきれいでだてなること
艶人の心目をうばふやうにあでやかなる
妍媚ふるが如く顔付がうつくしい
娟姿がしほらしい
妖艶なれごもいやしげなり

うかゞふ
窺すきまからのぞいてやうすを知る
伺向のやうすを吟味する
候やうすをはかつてためらひまつ
覗物のかげからうつとみる
覘向のやうすをねらひみる

うつたへ
訴物を爭うて公沙汰にする
訟人の罪をつげ出る
獄是非曲直を決斷する

うるほふ
濕しめりがある
溼乾燥の反びつしよりになる
滋いやましにじたくする

う　四五の　二三

澤 みづけあつて つやを帶ぶ
濡 ざんぶりと水に つかつたきみ
潤 しるけを含んで乾かぬ

●うらなふ
卜 考のきまつたるをいふ
占 やうすをうかゞ ひさつしあてる

●うづくまる
蹲 手をついてつくばふ
踞 物の上に腰を すゑてすわる

の

●のり
規 まちがひのなきこと
矩 仝上

儀 物のほうをいふ
憲 はつきりとしたおきて
法 手本になること
則 それ〳〵にし わけたるもの

●のみ
耳 これだけにて一 ありて二なし
已 もうこれぎりだ
爾 この通りた

●のぼる
騰 下から飛び上がる
登 降の反 上の方へゆく
上 下のものが上になる
陞 小口から段々進む
昇(舛) はこびがつく
陟 降の反 高い處へゆく

●のこる
存 あるまいと思ふ
殘 そこなひやぶれて わづかにのこる
遺 さりのこして あとにあまる
貽 爲めになるやうに のこしておくる

●のぶる
伸 屈の對 ひきのばす
舒 卷の反 卷きたる たひろげのばす
展 ひらいて見え るやうにする
宣 ばつとあまれ くひろげる
述 下地そのまゝ たうけつぐ
延 長くひろげのばす
暢 塞ぐ事なくの んびりとなる

演 すぢあひをつ ゞけひろげる
陳 いひならべる
叙 次第して長々 とつゞける

●のがる
遜 じたいして人にゆづる
遁 人の來ぬ所へ 身をかくす
逃 立のきにげる
逭 仝上
逋 かけおちする
免 ぬけてしまふ

●のぞむ
望 高き又は遠きを見る
臨(莅) 下へ見おろす
枕 上からもたしかける

の　三四　お　二三

觸 不足よ思ふ

●のゝしる
罵 たゞちにさしあ て〳〵惡口をいふ
詈 いやといはれぬやうに わきから大聲たてる

お

●おふ
追 にげるものを おつかける
逐 あとからついてゆく
趁 あちこちおつ かけまはす
負 わが身にになひたもつ

●おい
耆 六十歳
老 七十歳
耋 八十歳
耄 九十歳近きおいぼれ

●おく
置 動かぬやうに そこにすゑる
舍 それなりよやめておく
措 手をはなす

●おす
撫 わきからおしやる
押 上からおしつける
壓 仝上の如くにして わもりにするきみ
捺 ちからを入れ ておしつける

●おもふ
思 間違ないかと心を つけくふうする
念 始終心にとめて忘れぬ

お　二　三

懐 心にこめて執着する
意 疑つておもはくをつける
惟 只一すぢにそればかりはかうとおもふ
想 心の中にかうとおもひやる
憶 心に覚えて居る
事をおもひだす
以 をつけておもふ
謂 心におもふやうといふきみ

●およぶ
及 さきへとゞく
逮 あとからおひつく
迨 段々にそこへかゝつてゆく

●おつる
隕 天に見えるものが地上にふみはづしおちる
落 勢にまけて其居處をはなれる

墮 高處よりくづれおちる
零 雨などがぽちくこぼれおちる

●おそし
遲 だら〳〵とちがあかぬ
晏 日のたけること
晩 日がくれておくればせになる

●おほふ
掩 手を以て一面にかくす
庇 ひさしのやうにたすけになる
蓋 上からふたをして見えぬやうにする
蔽 おつかぶせて物をさへぎる
覆 上からかゝつて中をつゝむ

●ねどる
喝 聲を出してしかりつける

威勢を示しておしつける
嚇 おどしてびつくりさせる
勦 向ふ見ずにおびやかす

●おそる
恐 心もとなく思ひ氣づかふ
悸 心にはつとこたえてむなざわぎする
懼 未來を氣づかつて用心する
惶 大切に思つてあわてまどふ
怯 心がなくびやうになる
懾 びつくりして氣を失ふ
畏 きみわるく思つてつゝしむ
怖 わけもなくこはがる

●おほし
多 少の反數かおほい

剩 むだにおほすぎる
夥 甚しくおほい

●おくる
饋 貴人におくりものにする
遣 あとの用に立てる
贈 おくつてやつて向ふの數をふやす
送 向ふへおくり屆ける
賂 願ひの叶ふ爲めにとおくる
餞 旅立つ人にはなむけする
賻 香奠の料にやる

●およぐ
游 流れわたりにする
泳 底をくゞる

●おほむね

お　三　四　五　く　二

率 あらかじめなり
概(槩) ならしてかう
概 だいふきみ
概 大かたこゝら
概 と推了する
約 大く〳〵りにする

●おもむく
趣 心がけた方へ氣をすゝめる
赴 向ふのつぼへゆきつく

●おとがひ
頤 口より下をさす
腮 頤より頬の所をいふ

●おほいなり
大 形のおほいなること
太 ふとくて程に過ぐ
奄 一面に場所を取る
偉 すぐれてみごと
宏 奥深くひろい
鴻 見たところぎやうさんなること
巨 細の反ふとい
浩 ふつくりとおほきい
洪 纖の反はびこつて高大なる
碩 内に實が一ぱいある
注 ごこまであるか
丕 わからぬなみはづれておほきい

く

●くむ
汲 水を
酌 酒を

く　二　三

掛よしあしをかげんしてくみさる

●くに

邦見込の廣さところ

國それ〳〵にしきつた一區域をいふ

洲水にそひたるしきり

州方角をわかたぬをいふ

●くま

阿山のすそまはり

隈水と土との打あひ

●くら

藏廣く物を納れる處をいふ

廩米ぐら

倉土藏

庫器具ぐら

窖穴ぐら

●くれ

晩ゆふかた

暮日のくれる時

夕夜にならんとするさかひ

昏日の入りかゝる時

●くだく

碎こまかにうちわる

摧氣力心志がくぢける

●くづれ

崩高山のおちくづれるをいふ

頹下にたれていつとなくくづれかゝる

壞そこれくづれる

●くらし

暗(闇)明の反光りが見えずまつくらなり

昧色のわかちが見えぬ

晦(暝)あとをくらましかくす

濛上に塞がるものがあつて見えぬ

●くもる

陰じめま物が出來て小かげになる

曇雲がうちかぶる

曚(曨)おぼろにうすぐもる

●くろし

黑すみ色のやうにくろい

黯つやなくどすぐろい

黧少し黃色を帶びたる

玄遠く深くて明の及ばぬところの色

●くらふ

食たべ物を口中に入れる

喫水や茶などをのむこと

啗一ばいくはせるきみ甘

啖大ぐらひする

●くゆる

悔以前の不心得が合點でき氣にかけくゆる

懺心得ちがひをわびて告げる

●くだる

下上からおりる

降舟の反下の方へさがつてくる

●くるしむ

苦いやな事をうけてすべなく思ふ

困さしつかえて難義の事

窘さしつまつてゆきどころにこまる

く　三　四　五

●くらぶる

比ならべてかんがへばかる

較ひとしからぬものの分量をくらべ合はす

●くつがへる

覆上が下にとひつくりかへる

顚上の方が下になる

倒たほれてさかさまになる

や

●やむ

已それぎりにつきてしまふ

罷其場をすましてのける

弭いつとなくほろび絶えてしまふ

息絶えてあとがない

●やく

燒廣く火をつけてやくに用う

煨むしやきにする

焚もえ次第にもえ上がらす

烙やきつけをする

燬烈火のことにてやけてしまつた事

●やすし

熄一いきやすむ

輟作の對止そこでさゝまつてどこへもゆかぬ

●やゝ

良よほどの間

稍わづかの間

較くらべて見るに物のそろはぬきみ

●やく

燒廣く火をつけてやくに用う

煨むしやきにする

焚もえ次第にもえ上がらす

烙やきつけをする

燬烈火のことにてやけてしまつた事

●やすし

安 危の反にてあぶなげなくおちつく。寧おちつき定まる

康 無事にゆく樂の義を含む

保 やぶれずそこれず

易 難の反むつかしくない

晏 安の如く尚ほ靜の義を兼ぬ

逸 勞の反わがまゝに樂をする

泰 おちついてせはしくない

靖 あわてない

●やぶる

破 すぢ道よりわれる

壞 ばらくにくずれそこなふ

傷 きづゝきそこなふ

弊 古くなり又數にもまれてそこなふ

毀 外からかける

●やせる

瘦 ほそくやせこける

瘠 けづゝたやうにやせて骨があらはれる

羸 やせてちからがない

●やまひ

疾 急にやみつくこと

病 疾の段々重くなりたるをいふ

癘 病の根に入りたるもの

疫 惡いはやりやまひ

疢(痼) 久しき病 卽ち持病

痾 それがくせのやうになるやまひ

●やとふ

傭 他の用に立つ

僦 間に合はす

倩 人の代りにしばらくかる

雇 相對づくでつかふ

賃 やとひのこと

●やしろ

祠 神をいつきまつるもの

社 所のうぢがみ

廟 前に拜殿あるもの

●やもめ

寡 つれあひのなきこと男女共に通ず

鰥 男の獨身もの

孀 女の獨身もの

嫠 一度もちたる夫を失ふたる女

●やはらか

柔 剛の反こはばらぬ

軟 硬の反かたからずしなくする

●やうやく

漸 次第にすゝむきみ

寖 いつのまにやらといふきみ

ま

●まつ

待 來たら相手にしやうとまつ

俟 あとから來るものをまつ

須 ぜひに無ければならぬものをまつ

●また

又 其上にも一つ加へる也 また外にもかういふことがある

亦 一方の物に比してそれもさうだがこれもといふ意

還 めぐりかへつてといふきみ

復 もとの處へ重なり至るきみ

也 これにはといふきみ

●まち

坊 一かまへしたもの

街 まつすぐの通り筋

巷 辻小路

町 田地のたてよこ

井 縱横十文字のもの

衢 人のより集る場所

●まさに

正 邪の反 丁度時にあたる

將 既の反やがてしかるべし

應 かくあるべしとおしはかる

當 かくなければならぬときめる

方 その場にのぞむ

●まもる

守 目をはなさず番する

護 あやまり無いやうに大切にかこふ

衞 外から來るものをふせぐ

戍 番をしてふせぐ

●まげる

枉 すぢがくるふ

曲 直の反 ひどくまがる

●まをす

奏 上にうかゞひ見る

白ありていにいふ
申念を入れる
稟向の意を伺ふ爲
啓口開きをして
言唯物をいふこと

●まかす
任向へ背負はす
委向ふ次第にする
信こゝぱちがはぬと見て向へまかす

●まづし
貧財寶無くて萬事窮したること
窶衣食住も出來ぬほど

●まつたし
全物がそろつて居る

完一つも欠けず
まるごとある

●まじはる
交兩方から入りちがひてくみ合ふ
接うけてそこへ出る
雑純一でなく種々の物が入りまじる
參數がさし加はる
混まざつて一し
ふくたになる
殺むざと入まじる

●まろうど
客外から來るものをいふ
賓大切な正客をいふ

け

●ける
蹴けたほす
蹴なげあげる

●けづる
削あとの見えぬやうにけす
刪切りのけてしなほす
剞みぞのあるものでほる
剛丸のみでほる

●けみする
檢一々それに合ふやうにしらべる
閲一通りずつと吟味する

●けがる
汚よごれきはづく
穢むさくきたない
瀆あまえて人に苦勞をかける

ふ

●ふす
伏起の對面を地につける
俯仰の對うつむく
偃(臥)坐の對足をのばし横になる

●ふむ
履そのあとをゆくこと
踐そのあとの通りにゆく
蹈足拍子でそれをふまへる
踏あとをせんぐりふみつける
跋どこと定めずふみゆく

●ふさぐ
擁こちらへ來られぬやうにさゝえとめる

杜道に物を置いて來られぬやうにする
塞中が一ぱい通ふ道が無い

●ふせぐ
防つゝみをして寄せつけぬやうにかまへる
禦向かから來るものを相手になつてとめる
拒たゞ寄せつけぬなり

●ふるふ
振ふり動かすこと
揮手に持つて物をふる
奮氣をはげまし自らそれにかゝる
篩物をふり出しこし出す
震次第にひゞきて渡る

●ふくむ
含中にくゝんで居る
哺口の中に入れて居る
喞(銜)くはえるほごのきみ

●ふるし
古今の對いくらも年月をへたるなり
宿持ち越してあとになつたこと
舊新の對年月たつたもの
故づゝと過ぎ去つた以前のこと
陳いく年月とも知れぬ

こ

●こ
子兩親の間に出來たもの
兒子のまだ年のゆかぬもの

●こふ

こ　二三

丐せがみ願つて
乞わが物にする
所望すること
請まごころを以て
れがひもとき

●ことと
事そのしよさに
ついた用向
載そのやうすをいふ

●これ
此彼の對引分けた物の中で事らこちらの方さす
之それがこいふきみ
斯このすぢがこいふきみ
維事物をつなぎ
是非の反是非を分別し一方をうけ一方を定む
諸それを其方になしゆく
旃それにしやうときめるきみ
焉こゝにさうあるところにこいふきみ

●こゝに
茲その場所をいふ
爰こゝこそはこいふきみ

●ことに
特とりわけ格別に
殊わきへ別にのける

●こびる
媚可愛がられるやうにきげんを取る
阿わが意思を曲げて人に從ふ

●ことば
言心にある事を口へ出してきかすもの
詞文句つゞきにあやあるもの
辭すぢみちのあるもの

●こゝろ
心動物の物を思ひ事を行ふつかさ
性うまれつき
意中の氣もち
情性の動き出るはたらき

●こたへ
答向の問をうけてへんじする
對向の呼んだのにへんじする
應感の反ひゞきこたへる

●でとし
如その通り
若向のやうにつき從ふ

●ころす

殺いのちを取る
戮みせしめとしては
ずかしめころす
弑目したの者が目
上の者をころす
鏖一人も殘さずころす
誅罪あるものをころす

●こゆる
超をどりこえる
越こちらをはなれて向へ入りこむ
逾とびこえる

●こひねがふ
冀なりにくい事をのぞむ
希珍らしがつて心がける
尙また此上にもといふきみ

●ことぐく

こ　五　え　二三　て　二　あ　二

盡念体に
悉一つ〳〵數へて殘さぬ

え

●える
得わが思ひ通りにできる
獲取つてわがものにする

●えらぶ
選數ある中から
擇すぐり取る
撰よしあしをより定める
擇獨りでのべる

て

●てる
照光りであたり
輝か見えすく
煇きら〳〵とかゞやく

あ

●あり
有無の反
在たゞそれがある也
在沒、去の反そこにある也

●あゝ
於只歎息の時
於乎(嗚呼)仝上
嗟(嗟夫)感心するきみ
噫悲哀痛哭の時
吁悲喜とも物に驚く時
咨(咨嗟)仝上

あ　二

嘻肝に徹する
咲恨みの〜じる

●あと
跡たよりになるべき足あと
痕形の殘りたるもの

●あふ
逢兩方から出あふ
遭間をおいて
遇期せずして
値めぐりあふ
合兩方からぐあひよくはまる
姤男女相あふ
邂(逅)たまさか出合ふ
會集まりあふ

晤相見てれんごろに語る

●あく
飽ひたるくない
饜食込てたんなふする
厭いやになる
慊十分にして不足なし

●あたる
當行ってあたる
直ほんとの價を持つ
中ねらひはづれず
抗はりあふ
方今此時

●あらふ
洗ざつとあらひ流す
濯清める
滌あらひ流す

●あへて
敢遠慮なくおし通す
肯のみこみとくしんする

●あまる
餘十分にて殘る
剩ありあまる
饒多くあまる
冗無用のものが殘る

●あし〻
惡善、美の反よからぬこと
凶吉の反ふしあはせ

●あぶる

炙こげる程に
煨火氣を通す
炮つ〜みやきにする

●あつし
厚濃の反ひろく用う
篤とりつめてあつい
淳まじりがない
敦一すぢに思ふ、德行性質の上にのみ用う
熱あつさを覺ゆひろく用う
炎火氣がきびしい
暑時節のあつさをいふ

●あらず
不それでないと輕く打消す
弗できぬといふほどにて不よりやゝつよし

非是の反そんな理が無い

●あぶら
脂動物の体中より出づるもの
膏脂のとけたるもの
油植物よりしぼりたる汁
腴あぶらぎつて肥えたるもの
膩人の膚などのあぶらたちきつてぎらぎつしたもの

●あはれむ
哀樂の反かなしみいたむ
恤ふびんに思ふ
憐いとしがる
憫氣の毒がる
愍心をつけてふびんがる

●あまねし
普どこまでも行わたる
周全上
遍幾度もゝ
浹內外となくうるほひが通る
洽ごこまでもよくしみわたる
汎どれもこれも

●あざむく
欺趣向をして
訐ほらをふいて
詐さうと思込ますやうに
瞞それと見せかけて取りちがへさす

●あやまる
錯くひちがつて合はぬ

あ　四五

誤　紙がつかずしてし
謬　そこなひをする
　　さうあるべき
　　のがはづれる
愆　心得ちがひをする
過　存じよらぬ不調法

●あらはる
顕　よく見える
發　内のものが外へ出る
見　目の前へ出る
露　むき出しになる
著　物事が明かになる
暴　人に見てくれ
　　ささらけ出す

●あらはす
表　外へ出して人に知らす
旌　功徳などを吹聽する

さ　二

●あらたむ
改　これまでの事
　　を切りかへる
革　つくろひなほす
悛　心を入れかへる

●あつまる
集　來り會する
聚　散つたものがまた
　　一かたまりになる
輯　一つに寄せをさめる
彙　類別に寄せる
鳩　一つ所へ寄り合ふ
醵　金錢を出し合ふ

●あざける
嘲　なぶりそしる
哈　なぶりわらふ

●あたゝか
暖　あたゝむる事に
　　てひろく用う
暄　日のあつたまり
温　湯などのむつ
　　くりとしたる

●あやうし
危　安の反
殆　おちつかぬ
　　かうもあらうかさい
　　ふきみ又近しの意

●あたらしゝ
新　古くないこと又
鮮　はじめてのきみ
　　出來たてにてまだ色
　　味のさめぬをいふ

さ

●さす
指　目あての處をゆびさす

刺　とげや針など
　　のさし込む事
螫　毒虫のさすことに用う

●さく
裂　ひつさきやぶる
割　きりやぶる

●さる
去　來、在の反
　　あちらへゆく
距　遠のいて居る

●さかん
盛　衰の反しげりさかえ
昌　て次第に大きくなる
　　次第〳〵におし
　　あげあらはる
壯　氣力みちてつよい
殷　盛に多きことにて内
　　にさかんなるきみ
熾　勢の目立つをいふ

さ　二三

●さゝふ
支　持ちこたえる
障　一重へだてる

●さかふ
逆　順の反
　　さかさまになる
忤　無理に心にさから
　　つて氣にいらぬ

●さとし
敏　才智德行がすぐれ
　　る又すばやいきみ
頴　早のみこみをする
聰　聞取りが明かで早い

●さとる
悟　自分で氣がつ
　　き合點がゆく
覺　忽ち明かになるきみ
曉　利害に明かにして
　　疑のはれることを

了　さつぱりさらちがあく

●さわぐ
躁　おちつかぬ
騒　いそがはしくみだれる
擾　わづらはしく
　　かきさわがす

●さむる
寤　半ばさめて目をあける
覺　目がさめ合點がゆく
醒　醉などがさめて人
　　心つきたるをいふ

●さぐる
探　奥深く入り込む
搜　あつたものゝ見えぬ
索　やうにさがす
　　たやうすの知れぬもの
　　をさぐりもとめる

●さきに

さ　三四五

響 既往の久しからぬこと
曩 今より過去つたるをいふ
前 この以前といふこと
先 さいしよにすゝむこと

●さかひ
域 それ〳〵に一と構したるもの
界 兩方の相合ふきは
境 地面の隣り合ふ處

●さかな
魚 すべてうをゝいふ
肴 取合はせたるおかず
膳 肉類のおかず
核 精進物のおかず

●さいはひ

き　二

幸 仕合のよきこと
福 ゆつたりとしたること
祥 吉事のしるし
倖 思ひもうけぬこと
ぼれざいはひ

●さかづき
盃(杯) 小さく淺きもの
盞 甚小さく平らなるもの
鍾 小さくつぼみたるもの
巵 とつてのあるもの
白 名にはあらず一ばい
名 すべて酒をつゝ名

●さしはさむ
挾 わきにはさむ
搢 かざりにさしおく
挿 さしこむ
傳 無造作にさし入る

き

●きく
聞 聲が耳の中へ入ること
聽 念を入れてきゝとる

●きる
被 身にひつかける
著 肌におちつける
剪 はさみにてはさみきる
切 きりわつてはなす
截 つゞかぬやう
斬 にたちわけること
別々にすること

斷 すたゝにきりすてる
伐 木などをきりたほす

●きづ
疵 きりきづのはつき
瑕 全体もちまへのきづ
瘢 などのなほつて
痍 あとになつたもの
玭 玉のきづ
傷 損じたるきりきづ

●きよし
清 濁の反 すんできれいなること
淨 穢の反 きれいにきよめること
潔 さつぱりとして
廉 よごれて居らぬ
白 清にして潔なるをいふ

き　二三四

●きゆる
消 つきてなくなる
滅 たえて見えぬ
やうになる

●きざす
萠 外へ出やうとして內
芽 に其形がそなはる
外へ少しあらはれる
兆 何となく樣子が見える

●きたふ
鍛 かれをやいてかすを
錬 去り加減よくする
重 鍛の幾度もくり
冶 かれを型にいふ
見 て見えよくする

●きはまる
窮 とまりまでせ
究 んじつめる
とまりまで尋ねて見る

ゆ　二

鞠 せりつまつて
極 動きが取れぬ
谷 はてまでしづめる
竟 あとへも前へ
向 もゆかれぬ
ゆきあたる

ゆ

●ゆく
徂 さきへくと遠くなる
行 止の反 あるいてゆく
往 さきへいつたぎりかへつて來ぬ
逝 向ふへいつてしまつて
之 こつちの物でなくなる
殂 さす所へおもむく
死 死んでゆくこと

●ゆる

ゆ　二三

故 上を承け下を起すそれだからといふきみ
由 かうなるわけ
以 上を承けることばうのはずだといふきみ

●ゆるす

免 そこなのがる
允 向に信用せら るゝといふ
聽 きゝ入れる
容 かんにんしてやる
許 それでよしとする
赦 ときゆるす
恕了 簡をつける

●ゆたか

饒 足り満ちて不自由かない
豐 多くなければども満ちたるかたち

め　一三

緒 引しめざるやうす
裕 ひろくてせまらぬこと
膂 おちついて居る

●ゆづる

禪 場所を人にわたしてのける
讓 じぎあひをする
遜 居所をはづしのける

め

●め

雌 鳥のめす
牝 獸のめす
妻 よめいりして來るもの
婦 夫のあるもの
女 男でないもの
目 目の形体をさす
眼 目の精神をさす
睛 目の玉
眸 まなじり
瞳 ひとみ

●めぐむ

惠 なんぎなもの に物をやる
恤 仝上 すくふきみ

●めぐる

遶 物のまはり
巡 それからそれと見あるく
迴(回) 物の自らまはること
旋 くるくるとまはる

周 すみからすみまでまはる

み

●みる

視 心をとめて
目 目じろしをつけてそばへよつて
見 目にふれる
觀 つらくけんぶつする
覽 一目に見とほす
矚 じつと目をとめて
瞻 仰ぎみる
瞰 うつむきみる
相 物をみたて目きゝをする
瞥 目にちらつく

み　二三四

看 目をつけてつくづくとながめみつめる

●みち

道 たゞ往來するところ
途 ふみつけて通したる處
路 こみちをいふ

●みだり

妄 わけなしにする
漫 とりしめもなくむしやうに
濫 向ふ見ずに中へまぎれ入る
猥 なれくしくよりつく

●みつる

充 すみまでゆきわたる
滿 飲の反一ぱいにひろがる
盈 盃の反外へあふれる

●みだる

亂 治の反つかまへごころなくごつたになる
擾 みだれてまぎらはしくやかましきゝみ
紊 すぢをちがへもつれる

●みがく

琢 かきたる所をみがき其器をつくりなす
磨 石ですりとぎへらす
研 刀などをとぎすます

●みづから

自 わがみをさす
躬 身に引かけてする

●みにくし

醜 目をあてゝ見られぬ
陋 下品なること

し　二　三

悪みつきのよくないこと
蚩ふきりやうなること

し

●しる
知心に物のわかちをする
識見おぼえ聞おぼえる

●しく
布どこまでも一面にのべる
敷ゆきわたらす
施加へてそこまで
しきおよぼす

●しふ
誣非を是のやう
にいひまげる
強むりにつとめてする

●しづかに
閑忙の反これさい
ふ用のないこと
靜動、躁の反
さわがしからぬこと
寂しんとしてさびしい
寞聲なくはてもない
寥ひろくて取つく所の
ないほどしんとする
閨室中人なきを
いふ音なき義を
徐言行動作のゆる
やかなるをいふ

●しげる
繁簡の反
多くていやが上になる
滋次第にふえて多くなる
蕃盛に多きこと
茂多き意なし盛
なる意のみ也

●したふ
慕心になつかし
く思て忘れぬ
戀心がつながつてき
りはなしにくい
欽尊く思ふ

●しるす
記忘れぬ爲めにお
ぼえがきする
識見しりの爲に
おぼえておく
志おぼえがきする
誌人の目につくや
うにかきつける
錄何となくたゞ
かきつける
署念の爲めにしわけ
をしてかきしるす
銘物に名をつけて
そのわけをかく
勒文字をほりつける

●しるし
効きゝめの外へ
あらはれたる

徵引あはせて見る
驗しようこにする
印あとでわかるやう
にしるしをつける
標見えわたること

●しづむ
沈底の方になつて知れぬ
湎酒を量なしにのむこと
沒中へはまつて上
かはに見えぬ
鎭動かぬやうに
おさへおく
淪水に溺れてあ
がりかぬる

●しぼむ
凋生氣を失ひやぶる〳〵
萎ぐつしやりとし
て元氣がない

し　三　四

●しかり
然その通り
爾かうである

●しめす
示其物を直ちに人の目
にさまるやうにする
見あらはして見させる
呈前へさし出して
御覽に入れる

●しぼる
絞手でしめる
搾しめ水にかけ壓
して汁を出す

●しろし
白はつきりとしたる
素外の色少しもなく
きぢのまゝなる

●したしむ
親身に引つけ愛する
成つゞきのはなれぬ
やうに心やすい
嬖寵愛して始終そ
ばをはなさぬ

●したがふ
從遵の反
だがはずついてゆく
隨向ふへまかして
てついてゆく
遵その通りまもつ
てついてゆく

●しばらく
且それなりにさし
おく又當分の意
姑ちよつとの間
暫久の反
永くない間
頃よほどの間
霎見合して居る
ほどの事

●しばく
數疏の反同じ事が
たびく重なる

し　四ゑ

屢またしてもそれになる

しきりに
頻せはしなく近づく
荐いやが上にお
しかけ重なる
連引つゞき絶間ない
切しつかりとし
てうはつかぬ

しりぞく
退進の反
あとへのく
擯その中からはねだす
却あとへつきやる

ゑ

ゑ
畫形模様をうつ
したるもの

一ひ　二　三

繪全上の彩色したるもの

ひ

ひく
引こちらへ長く
ひきつける
聖ゆかうとするを邪
魔してひきとめる
抽ひつぱり出す
曳あとへひきずる
彈手にてはぢきひく
牽つなをつけてひつぱる
輓車を
攣弓を

ひま
間物と物とのあはひ
又忙しからぬこと
隙間のすいたところ
暇用のないこと

ひとし
均つきふらして同
じふみにする
齊長短等なく一
樣にそろふ
等それと段が同じい

ひろし
廣狹の反くわらりとし
てさしつかへがない
博はゞひろくしてゆ
きたけのあるきみ
寛くつろぎがある
宏中がひろく大きい
弘宏とほゞ同じ功德
事業の上に用う
浩はてのないきみ

ひとり

獨はなれて相手がない
孤あとへとりのこ
されたること
單そへ物のないこと
特とりわけて其一つ

ひそか
私自分勝手の內證ごと
竊人の目をはづす
秘人に見せぬやう
にくくとする
陰うらかげにてすること

ひらく
開閉の反
どこまでも見え渡る
闢わきへおしやる
披兩方へひろげわける
拓土地を廣大にすること

ひ　三五　ゐ　二

發覆ものを除き
て口をあける
啓みちをつける

ひそむ
顰眉間に皺を寄せ
る又まれたする
蟄中にすくんで
頭を出さぬ
潛深く底にかくれる

ひるがへる
翻ひらりとうらを見せる
翩かるくひつくりかへる
飄風に吹かれて散る

も

もの
物すべて形象あるもの
重に品ものをいふ
者事を指し主として
いふ重に人をいふ

もと
素きぢのまゝ
元手のつかぬはじまり
本根もとのこと
下下になる方をいふ
固全体にて以前の樣
故以前のこと

もし
如萬一あらばといふきみ
設無い事だがかり
にいうて見れば
卽ぢきに其事にして見る
儻ひよつとしたら

もる

も　三四五

洩(泄)出べき處へ出ず
漏こぼれおつるきみ
盛上へもり上げる

●もとむ
求ほしがる
需なければならぬものをいふ
覓さがし出す

●もうく
設その爲めにこしらへる
儲用意する

●ものうし
情氣が進まぬ
懶しかけてうつ
懶ぶしやうなること

せ　三

●もしくば
或いくつにも分れたるをいふきみ
若一つにしてこれならとてまたこれもといふ

●もつぱら
專わき目ふらず
純一すぢなる
雜の反まじりなきもの

●もろ〳〵
諸いろ〳〵あるを集めたるをいふ
庶數の多いこと
衆量の多いこと

●もてあそぶ
弄なぶりものにする
玩(翫)とりあつかひなぐさめる

せ

●せむる
責其罪を正す
譴しそんじをとがめしかる
數罪をかぞへたてせめる
攻一すぢにせめつける

●せまし
狹廣の反空地なくうくつなること
隘兩方つまりてはたらきにくい

●せまる
迫せはしなくおひつめる
薄すれ〳〵につきせまる

逼間近く急につめよせる

●せしむ
令おしつけさしづする
使さうさせる

す

●すむ
棲かりにとまりをる
栖よるべをもとめる
住そこを居どころにして外へうつらぬ
澄にごりが底の方にあること
清すきとほること

●すふ
吸息にて引入れる

せ　三　す　二　三

啜口へすゝりこむ

●する
摩手でなでる少すれ合ふ
磨みがいて上品にする
擂すりつぶす

●すつる
捨用の反それなりにすてゝかまはぬ
棄やくに立たゝぬものにする
捐用に立たぬとして外へかたづけおく
舍とり上げぬ

●すべて
都四方から集め見てどれもこれもといふきみ
總大もとをくゝりしめる
渾一面にといふこゝろ

凡おしなべて

●すでに
既將の反さくの以前に終りたるあと
已未の反事の終らざる間にいひおこすことば

●すゝむ
進退の反あとへひかぬこと
薦ならべすゝめて向ふへ受けさせる
勸かうせよと其氣になるやうにする

●すくふ
援向へ力を入れてたすけ上げる
掬兩手でむすびあげる
濟難義の場をぶなんにこえさせてやる
救急場をたすけてやる

●すぶる

す　三四

管觀下をすべつかさどる

轄しまりになつて動かぬやうにする

部物の類分けをしてすべる

すなはち

則にして見れば

乃そこでと用に用う乃況の如し

迺そこでと体に用う迺顚の如し

即さりもなほさずかうである

輙たちまちといふきみ常に必といふ意あり

すみやか

速遲の反ひまどらぬ

迅存外にはやい

遽めつたむしやうにはやい

亟一時になり來るをいふ

疾徐の反せつかちなることと

卒急にやつてくること

すくなし

少多の反數が足らぬ

尠ばぶけてへりたること

鮮いくらもありはせぬ

するどし

鋭きれあぢのよきこと

利すらくとよくきくこと

尖とがりたること

附錄

畢

正誤

ページ	段	行	誤	正
九全三	下	五	愚報	愚。報
九二	下	七	しんく	ぐんく
八三	上	五	貫ひ	貫ひ
七九	下	九	博ぬ	博す
七八	上	五	むかう	むかふ
七七	下	八	ざりう	ざりふ
七一	上	五	れくだ	れくた
全	下	四	〜狙	。狙〜
六九	上	一	つゝを	つゝを
十五	上	一	ぞん	そん
六〇	上	五	たわい	たはい
四三	上	六	おさに	おきに
四二	上	八	餐餐	餐。餐
三九	下	一〇	たしめ	おしめ
三八	上	七	おろか、	をろか
二九	下	二	そつ	うつ
二五	下	八	ごつと	どつか
全	下	三	ぼまち	ほまち
一九	上	六	濠ばた	朦ばた
一八	上	六	遲ばた	遲ばた
九八	下	四	〜ぐ	〜ぐ
九一	下	七	〜ぐ	〜ぐ
〇六	上	七	〜ぐ	〜ぐ
〇一	下	七	〜ぐ	〜ぐ
一二	上	七	〜ぐ	〜ぐ
一三	上	七	〜ぐ	〜ぐ
一四	下	七	〜ぐ	〜ぐ
一五	上	七	〜ぐ	〜ぐ
一六	上	七	〜ぐ	〜ぐ
三〇	上	七	〜ぐ	〜ぐ
三四	上	七	〜ぐ	〜ぐ
三九	下	七	〜ぐ	〜ぐ
三二	上	七	〜ぐ	〜ぐ
四八	下	七	〜ぐ	〜ぐ
四九	下	七	〜ぐ	〜ぐ
五二	下	七	〜ぐ	〜ぐ
五三	下	七	〜ぐ	〜ぐ
五五	上	七	〜ぐ	〜ぐ
五九	上	七	〜ぐ	〜ぐ
六一	上	七	〜ぐ	〜ぐ
六七	下	七	〜ぐ	〜ぐ
九六	下	四	要まつち	要マツチ
九八	下	七	かへし	かへ
〇一	上	七	餓(腐敗)る	餓る
〇六	上	七	殷々	殷々
一一	下	七	徹る	徹える
一二	上	七	殷々	殷々
一三	上	七	大姥小姥	大姑小姑
一四	下	七	え(ね)	え(ゑ)
一五	上	七	欄外	
一六	上	七	たから	反から
三〇	下	七	まらけ	さらけ
三四	上	七	ざよつ	ぎよつ
三九	上	七	(目授。駿)	悉くケヅル
四二	上	七	駒	駒
四八	下	七	多姑	外姑
四九	下	七	しゆぢん	しゆちん
五二	下	七	じやく	しやく
五三	下	七	遊すら	遊るら
五五	上	七	ひから	ひがら
五九	上	七	ほつら	ほつち
六一	上	七	ほだ	はだ
六七	下	七	偷	(偷

26/10/34

明治三十二年十月三十日印刷
明治三十二年十月廿二日發行

奥附

定價金貳拾五錢

版權所有

著作者　東京市牛込區揚場町七番地　宇野秋皐

發行者　東京市神田區今川小路二丁目四番地　栗原萬壽

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷田町一丁目六番地　山崎與平

印刷所　東京市牛込區神樂町一丁目二番地　一心堂小島工場
（電話番町三四三）

發行所　東京市神田區今川小路二丁目四番地　淺岡書籍店

●梅村準吉編　口繪　元錄美人對秋色（極彩色密畫）

帝國旅館錄

全一冊　定價二十錢　郵稅四錢

附　名所案内　寫眞石版及木版圖十數個挿入

本書は我國現時の旅館紀念として傍ら旅行者の侶伴として編纂せるもの、地理産物等より旅館の特色宿泊料等に至る迄詳述遺す所なし南船北馬此書一日も無かるべからず

大賣捌所　東京牛込神樂町三丁目　**盛文堂書房**

●淺岡書籍店新刊書目

爲換振込は飯田町局郵券代用は一割增

東京文學會編纂

●美辭文範

全一冊　定價廿五錢　郵稅四錢

本書は古代及近世文學書中の名著傑作に就き絶妙の美文のみを摘錄したるものなり

目次概要

●季候　春　夏　秋　冬
●景色　都市　村落　山　河　海
●人品　美男　美女　貴女　少女　妓女
●人情　恩愛　戀愛　別離　羈旅
●人事　雜の一　雜の二　雜の三

川上武若譯述

●フランクリン自叙傳

直譯　上卷　定價二十五錢　郵稅四錢

譯述穩當正鵠にして既に顯はれたる書に比し一頭地を擢んてたるは開卷直ちに之を知るを得ん篤學の諸士幸に座右の友とせよ

●香港

全一冊　定價廿五錢　郵稅四錢

此書香港の歷史風俗政治商業等凡ての事情を詳述す東洋の大勢を知らんと欲する者は必ず先づ之を繙け

●諸官省　會社　銀行　協會　學校　商品御用
精製

こんにやく版廉價販賣廣告

弊店製造のこんにやく版は原料を精選し製法に注意を加へたるを以て世上千百の餘製品と異なり版質の純白透明なること多年大方の賞讃を博せし所に有之且つ其價格も左項記載の如く極めて低廉に販賣仕候間續々御註文被仰付度希上候也

種類	厚サ	定價	小包重量
美濃版	四分	壹圓七拾錢(箱共)	八百匁
半紙版	仝	壹圓參拾錢(仝)	六百匁
半紙半面版	仝	七拾錢(仝)	四百匁
はがき版	二分	貳拾五錢(仝)	二百匁

●現品は代金及小包料領收次第即時發送可仕候
●爲換を以て代金及小包料御送りの節は必ず飯田町局宛に御振込被下度
郵券代用は一割增の事と御承知置願上候

製造發賣元　東京神田今川小路二丁目四番地　**淺岡書籍店**

29
118

29
118

081980-000-4

29-118

俗語と難辞

宇野　秋皐／著

M32
DAC-6984